

アイザック・バシェヴィス・シンガーと ホロコースト文学

佐川和茂

はじめに

カナダのケベックで誕生したソール・ベローやニューヨークで生まれたバーナード・マラマッドと比較した場合、アイザック・バシェヴィス・シンガー（1904 - 91）には、顕著な特質が見られる。それは、ポーランドで生まれ育ち、民話風の語りや、数世紀を集約する歴史観や、神秘的なリアリズムを通し、ヒトラーによって失われた東欧ユダヤ世界を後世に残したいがために書く、という創作態度である。

シンガーは、作家の素質を育むためには恵まれた環境で成長した。代々ラビを務めた家系に生まれ、ユダヤ教ハシディズム派の敬虔なラビであった父の神秘主義と、宗教心はあるが合理主義者であった母の影響を受けた。幼時に父の書物を玩具とし、語りの巧みな両親や、著名な作家となった兄イスラエル・ジョシュア・シンガーや、女流作家となった姉に囲まれているのである。第一次大戦前および大戦中はワルシャワのゲットーで過ごし、そこで作品の素材となる多様な人間像を学んだ彼は、ホロコーストを予期し35年に渡米している。したがって、ホロコーストを直接体験したわけではないが、「その亡命者たちと何年間もニューヨークで暮らした」（『愛の迷路』序文）という。過去を生きるイディッシュ語作家として亡霊の言葉で語る彼は、亡くなった兄の息子ヨセフ・シンガーを含めた翻訳陣に囲まれ、自らも自作の英訳に携わり、「第2

の原作」と愛着を込めて呼ぶ、40冊にも上る小説、短編集、童話などを発表している。そして、その大部分が、ホロコースト前後を背景としているのである。

1 危機的状況における人間性と信仰——『ゴライの悪魔』

シンガーの処女作『ゴライの悪魔』は、『アイザック・バシェヴィス・シンガーの達成』にも指摘があるように、作家の方向を示したものとして意義深い。

その一つは、悪魔学に傾倒していたシンガーが、直截な写実小説ではなく、悪魔的・超自然的な作品傾向を打ち出したことである。

2つ目は、この作品が17世紀から20世紀にわたるポーランドの失われたユダヤ世界を描いてゆく端緒となったことである。これに関して、『父の調停裁判所』に含まれる以下のエピソードは見逃せない。子供時代にシンガーは、戦争で食糧事情が悪化したワルシャワを逃れ、母の生まれ故郷ビルゴレイに疎開するが、そこは鉄道から隔てられた「この世界の果て」に位置し、謹厳な祖父ラビによって悪魔の誘惑から守られている。「この古いユダヤ世界において、精神的な埋蔵物を見出した。過去をそっくり見る機会に恵まれたのだ。時間が逆流してゆくようだった。僕はユダヤの歴史を生きたのだ」。これは未来の作家シンガーにとって、かけがえのない発見であった。この体験なくしては、17世紀を背景とした『ゴライの悪魔』執筆は不可能であった、と述懐している。

そして、3点目は、本作品がヒトラーのホロコーストを連想させるフミエルニッキーのユダヤ人虐殺（ポグロム）を背景としていることである。コサックの首領ポグダン・フミエルニッキーが兵を率いてポーランドの地主階級に反乱を起こし、その途上でユダヤ人を虐殺してゆく。1648年から58年にかけて、10万人もが犠牲になったという。また、その残虐性は極まりない。「連中はあらゆる方面で殺戮を犯した。生きた

まま男たちの皮をはぎ、幼児を虐殺し、女たちに乱暴を働いた後、腹を切り開き、猫を縫いこんだ」と。「神を信仰する者がなぜこのような苦難にあわねばならないのか。」第一部の中心人物ラビ・ベニッシュの問いは悲痛である。

一方、この終末的荒廃は、ユダヤ民族が待望したメシア到来の前兆ではないか、との解釈が生じてくる。『遙かなる天国』にもあるように、「メシアは同時代の人々がすべて罪を犯し、不正行為にふけるとき初めて、ユダヤ民族に到来する」場合があり、『神を求める少年』でも「メシアは世俗的な救済や失われた領土回復ではなく、世界を変え、諸悪を絶ち、天国を現世にもたらす魂の救いなのだ」と述べられる説を、ゴライの人々は信奉するのである。

折も折とて、地の果てにひっそりと息づくゴライにまで、救世主を名乗るシャバタイ・ツヴィの知らせが届く。続いて、その信奉者で禁欲的なイッチェ・メイツやヒトラーを連想させるゲダリアという人物が現われ、人心を惹きつけ、彼らに疑いを抱く少数者の声をかき消してゆく。この時点で理性は、激情の手先に等しい。

シャバタイ・ツヴィは1648年、自らメシアを名乗り、東欧ユダヤ人の中で多くの信者を得たが、逮捕され投獄され、サルタン王の尋問を受けた際、自らの命を惜しみ、イスラム教に改宗した人物である。そうした偽メシアの手先がゴライにまで出現し、戒律に基づいた生活を破壊し、人々をたぶらかし、墮落へと陥れてゆく。

ゴライにおいてシャバタイ・ツヴィ一派の勢力が増してくると、メシア到来の暁には迎えの雲に乗り、聖地に飛んでゆくことを当てにして、日常生活が墮落してしまう。そこで、その期待が外れたとき、人々の落胆振りには眼も当てられない。欲求不満のゆえに、喧嘩や殺人が勃発し、果ては信仰生活の崩壊を象徴するかのよう、「祈りの家」の壁が破損してしまう。シャバタイ・ツヴィ改宗の知らせがもたらされたとき、ゴライは彼の支持派と反対派に分裂し、腐敗傾向が日に日に増してゆく。

暴力や窃盗がはびこり、飢饉が発生し、人々を襲う絶望感をいっそう募らせるかのように、火事が頻発する。精神の平安や現世の快樂を約束したシャバタイ・ツヴィは、結果として、ゴライの分裂とこの上ない苦難を招いたのである。

こうした17世紀のユダヤ共同体を襲った精神的荒廃を食い止めるべき人物としてラビ・ベニッシュが描かれている。彼は、「ラビの生存中、ビルゴレイは腐敗から守られた」と『父の調停裁判所』で回想される祖父がモデルであろう。不運に遭遇しても信仰生活を堅持してきた指導者であるが、彼の家庭には問題が山積している。長男は50歳になろうとするのに定職がなく、その弟の嫁は貴族風に振舞って怠惰であり、ポグロムの犠牲となった娘たちの遺児があふれ、おまけに離婚した娘がともに住む。彼らは骨肉の争いを続け、年老いたラビを苦しめている。これはまさに、『モスカット家』同様、疲弊し、内部分裂をきたしたユダヤ社会の縮図ではないか。ラビ・ベニッシュはポグロム以後、信仰上の悩みも多いが、それでも現実逃避の神秘思想には走らず、伝統を守り、堅実な生き方を人々に勧める。しかし、内部分裂と飢饉の悪化する一方で、まともな話し相手も見出せず、孤立してゆく。やがて、悪魔の手先と単身戦おうとするが、怪我をして倒れ、その痛みで意識が朦朧とする中、ルプリンへ行って死を待つのである。ここでは善が必ずしも効果的に作用せず、悪の勢力の強大さが印象付けられる。こうして第一部で、共同体の精神的支柱が倒れ、第2部でゴライの墮落がつるべ落としとなってゆく。

第2部でゴライの失墜を演出するのは、シャバタイ・ツヴィを信奉する儀式屠殺人ゲダリアである。彼の登場によって、ポグロムで屠殺人を失い困窮していたゴライの人々は、肉を味わえるようになる。彼は陰鬱で禁欲的なイッチェ・メイツと対照的に、細かいことにこだわらない陽気さを持って町中を活気付けてゆく。そして、父親のラビ職を継承したラビ・ベニッシュの次男に代わって、ゴライの実質的な指導者にのし上

がり、次第に戒律と異なる生活を広めてゆくのである。奇跡を行なう者として大勢を惹きつけ、低俗な欲望を満たして大衆の支持を取り付け、脅しによって反対者を沈黙させる。当然、彼の策動の元で人々の食生活や性生活は戒律に反し乱れてゆく。短編「妻殺し」（『ばか者ギンペル』所収）と同様、すでに4人の妻と死別しているこの男は、若い女性レイチェルと密かな関係を持ち、やがて彼女を妻とする。そして、彼女の奇怪な行動によって面目を失い、悪魔の手下である正体が暴露されるまで、ゴライに君臨し続けるのである。

悪魔の手先ゲダリアと結婚し、墓場で奇怪な行動に及ぶレイチェルは、フミエルニッキーによる虐殺が勃発した1648年に誕生したゆえにポグロムの影響を帯びており、ゴライの過去と未来とを体現している。常に独りきりでいて、精神的に風変わりな彼女は、ゴライと同様、やがて悪霊に取り付かれてしまう。

シンガーは、母方の祖父をラビ・ベニッシュに投影したように、レイチェルに彼自身の姉の性格を反映させている節がある。『父の調停裁判所』に描かれる姉は、シンガー兄弟同様に作家となるが、「性格がやや常軌を逸しており、時にヒステリーやてんかん症状を引き起こし」、「悪霊に取り付かれたようにも見え」、ゲダリアという人物の息子に嫁ぐよう望まれるのである。

精神がやや錯乱した姉をモデルとし、『アメリカで迷う』において、「病的な神経が人に付け入る奇異な幻覚に、文学は触れることすらしていない」と説くシンガーは、細心の注意を払い、レイチェルの悪霊に魅入れられ易い特質を、幼時から掘り下げてゆく。彼女は5歳で母を失い、父も行方知れずとなり、儀式屠殺人である男やもめのおじに預けられる。そこで多くの動物たちの無残な死を目撃し、おじの厳しい母親には夜な夜な恐怖の物語を聞かされ、彼女の断末魔に最後までつき合わされる。

レイチェルは度重なる恐怖の体験により片足が麻痺し、神経も侵されてしまうのである。それでも、男心を掻き立てる特質を持つ彼女は、イ

ツェ・メイツと結婚に至るものの、苦行の末に性的不能者と化した夫との交わりが得られない。そして、恐らくこうした歪みが高じて幻影を見るようになり、霊的な感情も芽生えて、メシアの到来を予言する。やがて、悪魔の手先ゲダリアと同じ屋根の下に暮らす彼女は、短編「不吉な結婚」（『アイザック・バシェヴィス・シンガー読本』所収）のヒンデルのように、サタンの子を身ごもるのである。

物語の最終場面では、ウィリアム・ブラッティの『エクソシスト』同様、緊迫した悪魔祓いが展開される。ここで悪霊は彼女より退散したかに見えるが、いまやゴライ同様に疲弊した彼女の肉体は世を去り、一つのモラルが残される。メシアを性急に求めた結果がこうした惨状を招いたのであると。

『ゴライの悪魔』は、ラビ・ベニッシュ、ゲダリア、レイチェルを主要人物として17世紀の「ホロコースト」以後を描いた作品であるが、その言わんとする意味を解釈する際に「クラコフから来た紳士」（『ばか者ギンペル』所収）が助けになってくれよう。ゴライ同様、僻地にあり、起源も不明なフランポルの村が天災に見舞われ、食料が底をついたとき奇跡が生じる。クラコフから、妻をお産で亡くしたという紳士が、奇跡を行なうラビのお告げにより、フランポルの窮状を救いに現われるのである。金を惜しげもなくばら撒き、村人たちの心をつかんだこの紳士は、自分で費用をまかない、前代未聞の舞踏会を開催し、そこで参会者がそれぞれ新妻を選ぶのであるという。疲弊した群集は、このため異常に興奮し、博学で知られたラビ・オザーの忠告をさえ聞き入れようとしな

い。

その舞踏会の当日、凶事の前兆と思える異常に大きな日没と怪物のごとくたなびく真つ赤な雲とを背景に紳士は言う。こともあろうにくじ引きによって、全ての処女は真夜中までに結婚相手を選び、彼から持参金や祝いの品物を受け取るようにと。そして、彼自身は、村はずれの沼地のそばに住む口汚く素行は最低のホーデルという娘をくじ引きで得るの

である。ここに前代未聞のきわめて不釣り合いな者同士の合同結婚式が展開される。不釣り合いな夫婦とは、シンガーの作品では、社会の無秩序を象徴するものである。続いて起こる大混乱の中で、精神が錯乱した人々を嵐が襲い、教会堂をはじめとして、村は不思議な落雷によって火の海と化す。そのとき紳士は始めて正体を現わすのである。彼はほかならぬ悪魔であり、ホーデルはその妻リリスであった。

この狂騒から一人離れて正気を保ったラビ・オザーは、泥沼にあえぐ同胞を必死で目覚めさせるが、大人たちが金に目がくらんでいた隙に、痛ましくも大火の犠牲となった幼児たちを救う術はない。紳士が悪魔であったことを見抜けず、民衆を悪の泥沼に落ち込むままにさせておいたラビ・オザーは、彼らの罪を自ら背負い、世を去ってゆくのである。そして、懺悔するフランポルの再建は、近隣のユダヤ共同体の援助を得て、その翌日から開始される。

ゴライやフランポルの物語は、危機的状況における人間性と信仰の問題を取り扱うものである。平常時ではなく、極限状況において自律精神を保つことがいかに困難か。人は、追い詰められると、理性を失い、群集心理に駆られ、病的な妄想に踊らされやすい。ゴライの民衆にもまして悪魔の餌食となるフランポルの人々は、かつて「ばか者ギンペル」において、一人の身代わりの山羊ギンペルをいじめ抜いて憂さ晴らしをした連中であり、ただ一人の聖人ラビ・オザーを除いて村全体が悪魔に身を委ねてゆく様は、まさに寓話「ヘルムの愚かな人々」を連想させ、強大な悪を前にした人間集団のもろさを印象付ける。このもろさがホロコーストへの道を許すのである。

ラビ・ベニッシュやラビ・オザーのような精神的な指導者が迷える群集を指導する立場にいるわけであるが、平常時ではともかく、危機的状況で動揺する人々を、いかに有効に導くことが可能か。「処罰の恐怖が失せれば、何が人々の偽りを阻止できようか」と「ヨム・キプールの電話」(『イメージ』所収)は問うが、信仰を喪失すれば、人々は神不在の

状況でますます悪へと走る。

これに対して、ラビ・オザーの個人的な犠牲によって、そしてさらには幾多のいたいけな幼児の死によって、フランポルの人々は懺悔し、平常心を取り戻したかに見える。しかし、これはシンガーの作品としては楽観的に過ぎよう。

一方、途中で倒れたラビ・ベニッシュの場合は、彼に取って代わる人物が存在せず、彼の宗教上の敵対者モルデカイ・ジェイコブがレイチェルの体内に宿った悪霊を駆逐して正義の人を振舞うが、これは構成上いささか不自然である。その上、数名の登場人物の扱いが尻切れトンボになり、構成にしまりの欠けた箇所も見られ、登場人物が内面的な厚みに乏しく、カリカチュアで終わっている点も否定できない。結果として、善と悪への審判が曖昧なままに終わっているのではないか。

2 悲劇が結ぶ愛——『奴隷』

『奴隷』の背景は『ゴライの悪魔』とほぼ同時代であり、フミエルニッキーに扇動されたポグロムの後、ヤコブとワンダ（後にサラとなる）の物語が生まれるのである。裕福なユダヤ家族の息子でタルムード教師であった29歳のヤコブは、コサック兵によって両親や妻子を虐殺され、自らはならず者たちに拉致され、山間部のポーランド人農夫に「奴隷」として売り飛ばされてしまう。このことによって、信仰心の篤い主人公と異教徒の娘との運命的な出会いが生じ、異宗教間の愛が燃え上がるのである。献身的に愛し合う2人は、社会の抑圧に耐えて、死後の再会を成就する。そこで、真の愛は、不正や悲劇を越え天の恵みを受けるのであると謳われ、「ばか者ギンペル」のように、神の業は結局正しい、という悟りに達するのである。これは、『ゴライの悪魔』の結末より肯定的であり、物語の出来映えも前作より優れている。

この物語で先ず注目したいことは、ポグロムの生存者ヤコブの生き方

である。悲劇は、聖典を信奉していた同胞を一変させ、人が到底受け入れることの困難な残虐行為を積み上げた。人の舌を抜き取る、乳房を切り取る、腹を割き犬猫を縫いこむ、母親の眼前でそのいたいけな子供を殺す、幼児を生き埋めにする、等々。彼は、こうした悲惨な記憶を引きずり、明日が予測不能な激変に身をさらしながら、生きてゆかねばならない。

しかし、ヤコブは厳しい環境に置かれても、ユダヤ人の特質を失うまいと懸命に努める。逃亡が不可能な奴隷として、夏は高山で家畜の世話をし、冬は穀物小屋で寝起きする生活を強いられるが、その間もイディッシュ語を忘れまいと努力し、石に戒律を刻み、聖典を暗誦し、戒律で許された食べ物のみを口にする。

ただし、こうした聖なる行為が、地獄の体験にもかかわらず神に対する不変の信仰を立証しているかと問えば、必ずしもそうではない。彼は、宇宙をつかさどる神の叡知を疑うものではないが、現世において神を愛することができない。それは、子供時代から神の業を理解しようと努めてきた彼にとって、幼児を生き埋めにする残虐行為を許す神の慈悲が信じられないからである。したがって、彼は神と絶え間なく論争し、生き物同士が殺しあう環境を創造した神を告訴するのである。

さらに、彼の批判は、神や殺人者たちのみでなく、ユダヤ人同胞にも向けられてゆく。同胞は、動物を虐待する点で、ポグロムを引き起こしたコサック兵と大差ないのではないか。そこで、彼は菜食主義者の道を選び、動物をあやめず、その肉を食べない。菜食は、大虐殺を黙認する神に対する彼自身の抗議形式であるといえよう。この態度は、ホロコースト生存者の生き方として、シンガーがしばしば描くものである。

このように、ユダヤ人の特質を失うまいと努め、菜食主義を神への抗議形式として実践する彼は、4年間の奴隷生活で芽生えたワンダへの愛のために苦しまねばならない。主人の娘ワンダは、毎日彼の食事を届けに山を登ってきて、搾った牛乳を持ち帰るのである。荒々しく無教養で

大酒飲みであった夫を落雷で失った彼女は、25歳の未亡人である。犬猫や鼠まで食い食う近隣の野獣娘たちの中にいて、気立てがよくひときわ美しい彼女は、長身の美青年である奴隷を慕い、彼の生命をいくたびか救い、彼がユダヤ性を守ろうとすることを援助している。虐殺されたヤコブの妻が利己的で冷淡であったのと引き換え、ワンダは情熱的な愛を注いでくれる。しかし、たとえ彼女が異宗教間の愛を全うするために、改宗さえ躊躇せず彼の妻となることを願っても、その過程において幾多の苦難を覚悟しなければならない。当時ポーランドにおいては、ユダヤ教への改宗者は、キリスト教徒によって生命を奪われ、一方、ユダヤ教は、神への忠誠ではなく、異性愛ゆえに改宗することを禁じていたからである。こうした逆境にあって、主人公の心中では、神とワンダを求める葛藤、そして善と悪との戦いが渦巻いてくる。

このようなある日、悪天候のゆえに、ワンダが奴隷の山小屋に泊まらざるを得なくなった際、ついに情欲が理性を負かし、身を清めた後で2人は激しく愛し合う。愛情に乏しかった彼の妻と異なり、ワンダは熱烈な愛によってヤコブを求める。その後、戒律を破り異教徒と同棲しているがゆえの心身の緩みを感じながらも、元タルムード教師は、彼女に神や人生について語るのである。

やがて、敵視しあうワンダの家族の中で唯一の頼りであった老父が、働きづくめのつらい生涯を終えると、2人にとって厳しい冬が到来する。奴隷の命を狙う荒々しい農夫たちが暗躍しだすのである。しかし、ヤコブは旅回りサーカスに故郷に当たて救出の伝言を依頼しておいたことが功を奏し、ワンダの留守中、突然ユダヤ人同胞によって救出されるのである。ワンダに後ろ髪を引かれる思いながら無事に帰郷し神学校の教師となったヤコブは、しかしながら、彼女を忘れようとしてもできない苦しみにつきまといられる。そしてある夜、彼女と我が子の夢を見て、物につかれたように道なき道を歩み、危険を承知で奴隷として暮らした村に戻り、すっかりやつれたワンダと再会するのである。

ヤコブは、父を失って今では彼のみを頼りとするワンダを伴い、人が野獣同然に暮らす村を抜け出す。そして、戒律を破って結婚し、改宗したワンダはサラと改名し、2人は不安に満ちた旅を続け、故郷より遠く離れたユダヤ共同体にたどり着く。そこで新郎は教師となり、新婦はイディッシュ語を話せないために正体が露見することを恐れ、聾啞者を装って暮らすのである。

やがてヤコブは『莊園』の実直な主人公キルマン・ジャコビーのように、封建領主の土地を管理する要職につき、悪賢い前任者ガーシオンとは対照的に領主の厚い信望を得て、世俗的な出世を果たす。しかし、彼の変わらない批判は、この土地のユダヤ人共同体に注がれてゆく。それは、同胞が器用で商売上手であり、敵陣でもたくましく自己の領域を拡大できる反面、瑣末な戒律を守っても十戒を破り、他人を中傷し虐待し続けている事実である。彼らはポグロムの試練によって教訓を得たというより、むしろその苦難によって品位を落としたようである。少数の善人が存在するとしても、上記のガーシオンのようにコサック兵に殺されたユダヤ人の財産をくすねて金持ちとなり、要職を奪う悪人たちが相変わらず社会を支配している。危険な指導者による専制、民衆に蔓延する憎悪や嫉妬は、宗教上の儀式がいくら広まろうとも絶えることがない。ここで共同体は、内部分裂や腐敗や無秩序の点で、ゴライやフランポルと大差がない。

この腐敗した共同体の中で、サラはギンペル同様、人々によってたかってばか者扱いにされつつ、昼は聾啞者を装ってひっそり暮らし、夜は夫を師としてイディッシュ語やユダヤの戒律を勤勉に学ぶが、ある日ついに正体を見破られてしまう。それは、ヤコブの子供を身ごもった際、非常に難産となり、苦しみのあまり禁じられた言葉を発してしまうからである。そして、元気な男子を出産するものの、自らは命を落としてしまう。野獣のような村人の間に生まれ、聖女のごとく成長したサラ（ワンダ）は、故郷やその言語を喪失し、ユダヤ社会への同化も果たせず、

ユダヤ人と異邦人の双方から隔てられた状態で、ヤコブとの9年間に渡る愛の生活を終えるのである。

一方、異教徒との結婚が白日の下にさらされたヤコブは、ユダヤ社会より追われ、兵士に連行されるが、途中で脱走する。同胞がポグロムに無抵抗であったことを批判する彼には、困難にくじけない抵抗力が備わっていたのである。世話になった夫婦より息子を貰い受け、その子にベニアミン（悲しみより生まれいずる子）と名づけ、幾多の危険を経て、イスラエルへ向かう。このとき、物語に散見していた聖書のヤコブとの比較が最も顕著となる。異邦人の巷で、偶像崇拝者より生まれた愛妻は世を去り、一人息子を残した。彼は、聖書のヤコブのごとく、エサウに追われ、杖のみを手にして、川を渡るのであった。

それから20年後、老いたヤコブは都市に変貌したかつての場所へ妻の墓を探しに戻ってくる。今では神学校の教師となった息子の待つイスラエルに、愛妻の遺骨を持ち帰ろうとするのである。ヤコブの帰還はユダヤ共同体に興奮を巻き起こすが、彼は貧者に尽くしながら救貧院に泊まった際、一夜にして病に犯され、志を果たさずして死んでしまう。ポーランド人農夫の、ワンダに対する激情の、そしてサラとの愛の、「奴隷」であった彼の生涯は、こうして幕を閉じたのである。しかし、彼の埋葬の際、20年を経てもそれと判別可能な妻の遺骨が奇跡的に掘り出される。参会者はここに神の御手の顕現を悟るのである。天に召された2人は並んで埋葬され、その墓碑銘には、シンガーが好んで繰り返すように、不正や悲劇を超越した愛を称える美しい言葉が刻み込まれる。

3 宗教上の日々の鍛錬——『ルブリンの魔術師』

『ルブリンの魔術師』は、『ゴライの悪魔』や『奴隷』の17世紀より離れ、19世紀のポーランドへと飛ぶ。歴史上、ポーランド東部の都市ルブリンは、郊外にマイダネク絶滅収容所が建てられ、ユダヤ評議会のナ

チ協力に対しユダヤ人大衆との間に軋轢が生じた。1941年、ゲッターが建設され、42年3月、ベルゼック絶滅収容所へゲッター住民の移送が開始される。1944年7月、ドイツ軍は撤退以前に残ったユダヤ人を殺害した。そして、1970年、ルブリンのユダヤ共同体はその幕を閉ざしたのである（『ホロコースト百科事典』 915 - 19）。

『ルブリンの魔術師』は、40歳の主人公ヤシャが人生に行き詰まり、奈落へと転落する寸前に過去を清算し、懺悔の道を選択する物語である。この内容は、シンガーの『悔悟者』やベローの『この日をつかめ』を連想させよう。また、ここでは、『ゴライの悪魔』や『奴隷』を貫く善と悪との戦いに関して、宗教上の日々の鍛錬が真正面から取り上げられている。すなわち、最終場面のヤシャは、人生の意義をその鍛錬に求めている。すなわち、最終場面のヤシャは、人生の意義をその鍛錬に求めて苦行に励み、現世での慈善と来世での至福を願うのである。

物語は、この段階へと至るヤシャの軌跡をたどるが、それを一言で形容するならば、「綱渡りの人生」と呼べるであろう。魔術師として、彼は子供時代より厳しい修行に打ち込み、名人としてポーランド中に知られているが、ユダヤ人であるゆえに、田舎回りの芸人として一生を終えるであろうし、報酬も名人芸の割には少ない。常に自慢せずにはられない彼の性格は、逆境でくすぶり続けるもどかしさを表わしているのであろう。

そのもどかしさゆえに精神的に駆り立てられるヤシャは、『愛の迷路』のハーマンのごとく、同時に4人の女性間を綱渡りし、さらに5人目を求めている。ちなみに、「イスラエルの背徳者」（『老いらくの恋』所収）においては、シンガーの父が4人の妻を持つ男を調停裁判所で裁く場面が回想されるが、こうした子供時代の見聞から無節制なヤシャが創造されたのかもしれない。

その無分別なヤシャと関わる4人の女性とは、先ず貞淑な妻エステルである。20年にわたる結婚生活において、不妊症である以外は申し分なく、40歳に近づいても若々しく、不安定な夫を精神的に支え、よいユダ

ヤ家庭を築こうと努めている。

しかし、移り気の激しい魔術師にとって、家事以外の話題に乏しい妻は退屈であり、そこで、仕事で家を空ける際には、マグダという20代後半のポーランド娘を愛人としてはべらせている。瘦身で動きの敏捷なマグダは、魔術師の助手を8年務め、常に主人を情熱的に愛しているが、尽くしても報われることは少ない。彼女の祖先は、400人の「奴隷」を所有した大地主であったが、今では零落し、母と素行の悪い弟を含めた一家は、ユダヤ人魔術師から金銭援助を受ける始末である。

ヤシャの旅先での別の愛人は、泥棒亭主を持つゼフトルである。脱獄したその夫は行方不明であり、彼女は貧しい生活を強いられている。ヤシャとは何事も率直に話し合える仲であり、悪の道へ入れば成功疑いなしと思われる彼を暗黒街へと惹きつけている。

そして、4人目の女性は、大学教授の未亡人で30代半ばのエミリアである。『奴隷』の場合と逆に、彼女は改宗し結婚し海外移住を経て、不遇から飛び立つようヤシャに勧めるのである。

これら4人の女性に加えて、ヤシャは、エミリアの14歳になる娘で、肝臓が弱く、登校せず、宙ぶらりんの状態にいるハリナにも密かに憧れているのである。

このように多彩な女性間を綱渡りする主人公は、酒飲みが悲しみをアルコールで紛らわすように、人生の倦怠をつかの間でも忘れようと、スリルとサスペンスを求め多くの愚考を重ねている。倦怠がいかにか人を狂わせるものであろうか。倦怠が高じると、人は戦争やホロコーストさえしでかす危険を抱えているのである。

ヤシャの倦怠は、核を見出しえない根無し草の人生から生じたものであろう。魔術師として旅をし、女性間を飛び回るが、ユダヤ人と異邦人の間でも宙ぶらりんである。子供時代より聖典研究を積むが、『モスカット家』のエイサ同様、知識は豊富でも実践が伴わない。神への信仰を抱けず、宗教行事に無頓着で、ワルシャワの異教徒地区のアパートから

妻の元へ帰るのは、重要な祝祭日のみという有様である。敬虔と異端、善と悪、欺瞞と誠意をまたがる迷路のごとき性格を持つ彼は、言語能力に優れ、貴婦人から泥棒まで多彩な人々と交わるが、どこへ行っても異邦人であり、一箇所に定住できない。混沌の人生をどうやら生きてゆくしかないのである。

根無し草ゆえの混沌は、『父の調停裁判所』において、ユダヤの道を放棄したが、新しい生き方にも独自性を見出せないシンガーの兄を連想させる。これはシンガー自身のジレンマとも重なり、ベン・シーゲルが「理性や情欲や魂の求めに分裂した精神的な異邦人」と呼ぶ様相を帯び、作品に投影されてくるのである。

すなわち、ヤシヤはその場限りの生き方に終始し、なんら長期展望を持ってない。新たな魔術や愛人を得ようと夢中になる以外、常に人生の虚無感に付きまといられる。その人生はあまりに混沌としており、要所で必要な行動に移る余裕すら得られない。そもそもヤシヤは実際面に弱く、エミリアとの将来に関しても具体性に乏しく非現実的である。一方、身を粉にして複数の愛人を援助し、その負担で心がはちきれそうであり、八方ふさがりの状態に陥ってゆく。「ブラジルでの一夜」（『老いらくの恋』所収）において、作家は、失敗を選び、混乱に溺れ、欺瞞の犠牲となる人々に惹かれると言うが、ヤシヤがまさにその一人である。「穴に気づいても、そこに落ち込んでしまうタイプ」と言えよう。

そして、それを如実に証明するかのようには、彼はある深夜エミリアを訪問する際、彼女との結婚や海外生活の費用を得るため、衝動的に泥棒を働こうとする。それは悪魔の誘惑であり、彼は外力に引かれるかのように動いてゆく。しかし、女性の心を開くことに巧みであると同様、錠開けの名人であり、邪道へ入れば成功疑いないと謳われていた彼は、最初の盗みに失敗し、逃亡の際、綱渡りに不可欠な足を怪我してしまう。それは皮肉にも、新しい技に挑戦し、魔術師として未来が見えてきた矢先のことである。

ただし、興味深いことに、この悪事の失敗と、綱渡りの人生を放棄せざるを得ないような負傷との中に、根は善良であるというヤシャは、神の啓示を認め、窃盗は神によって妨げられたのであると思う。容易にできたはずの金庫破りに失敗し、高所より飛び降りても平気なはずの足をくじいてしまった事実に、神意を感じ取るのである。

現実には、盗みを告白した際エミリアを失い、彼のつれなさに悲観したマグダは自殺し、ゼフトルは世話してくれる男性とよい仲になる。まさに彼は一步踏み外したとたん、すべてを失ってしまったのである。そして、経済的にも行き詰まり、寝場所もなく、壊疽になりかかった足を引きずってさ迷う。しかし、そうした窮地にあっても、一本の糸が深淵に落ちるのを救ってくれたのだと思う。

先ず、警官を逃れユダヤ教会堂へ逃げ込んだ際、罪人を許してくれる暖かい同胞にめぐり合う。さらにそこで、死の間際に彼の手を取り、ユダヤの道を守るよう諭した亡父の思い出がよみがえってくる。ヤシャは無宗教を装うが、実際、神の存在を信じているのである。草木を育む神に対する驚異は禁じがたく、自然の中に神の御手を認めているからである。実際、魔術師でさえ黒土より新芽を育むことは不可能であり、第一、彼にとって、世界が単に霧から生じたなど、信じがたいのである。彼は、苦難に負けず神への信仰に揺らぎない同胞を羨望していたが、自分を罪の状態で滅ぼそうとしない神の慈悲を感じ、これまでの生き方にふたをしようと決心するのである。

ヤシャは忠実な妻エステルの家に戻り、過去の生活を懺悔し、出入り口のない狭い石室に端座し、聖典を学ぶ生き方に入ってゆく。寒暑に耐え、切り詰めた暮らしの中で、ひたすら心を清めようとするのである。同時に、他者を苦しめ、狂気や死に至らしめた過去を反省し、迷惑をかけた人々に借りをできるだけ返そうと努めている。やがて、彼の元へは悩みを抱く男女が救いを求めて押しかけるようになる。相変わらず内面より悪魔のささやきは響くが、神の慈悲と、最後には善が勝利を収める

であろうという希望が支えになっている。十戒の精神に基づいて行動するよう努めるならば、この世でさえ改善されるであろうと。

また、神の慈悲に頼るのみでなく、自らの自由意志によって善を求めねばならない、と彼は言う。そのため必要なことが日々の鍛錬である。知識において豊かであったヤシャに欠けていたものは、宗教上の日々の鍛錬であった。彼は余生の意義をその鍛錬に求め苦行に励むのである。

ここで歴史を振り返るならば、各人がヤシャのように自由意志によって善を求め、日々の鍛錬を続けることが、ホロコースト以後の人間に望まれる生き方ではないか、と思われてくる。アラン・バーガーの『危機と聖約』においても、神との聖約に対する修復作業が各人に求められている。「ホロコーストの現実と直面し、聖約を新たにすることが、真のユダヤ人に課せられているのである」と。

こうしたヤシャの生き方は、類似の変貌をたどる『悔悟者』の主人公シャピロによって継続発展してゆく。ホロコーストやスターリンのロシアを生き延びたシャピロは、十戒の軽視から蛮行が生じると思い、ナチスを望まないのであれば、その対極であるタルムードを学ぶ真のユダヤ人にならねばという。信仰を堅持するユダヤ人は他人をあやめず、他者との交わりに暴力をもってしない。トラーや『シャルハン・アールフ』の道を、子孫に受け継いで欲しいと願うのみである。シャピロは「屠殺や売春の文明」を捨て、祖先が信奉していた古きユダヤの道に戻るために、イスラエル移住を断行するのである。暴力や流血を好まない彼にとって、生きてまま熱湯に投げ込まれるロプスターを含めて肉食する限り人はナチス同然であり、そこで『奴隷』のヤコブや『ショーシャ』のアーロンと同様、彼も神への抗議として菜食主義を実践する。エルサレムでのシャピロの生き方に、『ルブリンの魔術師』を一段と向上させた姿を見ることができよう。

4 最悪の敵——『愛の迷路』

『悔悟者』に示されたホロコースト以後の積極的な生き方は、主人公が紆余曲折を経てたどり着いた道であるが、シンガー自身はそれに憧れつつも距離を置いて眺めている節がある。その点、『愛の迷路』は、ヤシャやシャピロと似た人生のもつれを体験する主人公を描きながら、その生き方は前2者と比較して受身的であり、ここにホロコーストを経た人間を凝視するシンガーの別の眼が窺われよう。

『愛の迷路』は、『莊園』、『領地』、『モスカット家』に続くホロコースト以後の世界を描いたものであるが、その舞台はポーランドよりアメリカに移っている。そこでシンガーは、ペローの『サムラー氏の惑星』同様、多要素を含む文体を駆使し、強制収容所の生存者たちが、いかに重くその狂気の過去を背負っているかを物語るのである。彼らはシンガーのホロコーストを背景とする作品の貴重な断片を構成し、全体として読み応えのあるホロコースト以後の世界を構築している。

ただし、いくら断片を拾い集めても、ホロコースト体験の全貌は語りつくせない。悲劇の過去を忘れず、過去に生きようとする人物でさえ、「体験を十分に語る言葉がない」し、「生存者からホロコースト体験のすべてを聞きだすことは到底無理」なのである。そこでシンガーは、数名のユニークな体験を見据えることによって、全体像をほのめかす創作法を取る。そして、ここで興味深いことは、シンガーが、ホロコーストのみでなく自己の性格にも起因する犠牲者を描いていることである。

たとえば、登場人物の多くが、サムラー氏のホロコースト体験にも比肩する狂気と無秩序を経て夜な夜な悪夢に苦しむが、その中でも主人公ハーマンは、ホロコーストおよび彼自身の性格の犠牲者として、種々の要素を反映して首尾一貫しない。彼は3人の女性と複雑に絡み合い、『ルブリンの魔術師』ヤシャのように、彼女たちの間を綱渡りする。とりわけ、ハーマンの場合、その矛盾した性格は「彼自身にとっても謎」

であり、最後には完全にその主体性を見失ってゆくのである。

彼と絡み合う3人の女性とは、ヤドウィガ、マシャ、そしてタマラである。まず、ポーランドの農村出身で純朴なヤドウィガは、ハーマンの父の家で召使として働いていたころから彼を愛していた。ホロコーストの最中に、自分や家族の危険を承知の上で、ナチスの眼を避け、妻子を殺された彼を干草置き場に匿い、3年にわたって身の回りの世話をする。そして終戦後は彼につれられて渡米し、ニューヨークのアパートで3年間夫婦として暮らしているが、ポーランド村娘の雰囲気は抜けることはない。虚偽に満ち誰にも隠し事をする夫に対し、彼女は真実で善そのものであり、朝から晩までまめまめしく働き、愛する夫に尽くしている。無学であるが、信仰心に篤く、『奴隷』のワンダ（サラ）のように後にユダヤ教に改宗するのである。ところが、複雑な性格を持ち利己的なハーマンは、善良さがとりえのヤドウィガとの単調な生活に飽き足らず、複雑で頑固で狂気に満ちたマシャともひそかに付き合う。

マシャは、ゲットーや強制収容所を生き抜いた容貌を露わにし、ハーマンとの愛の床においてさえ、アウシュヴィッツを黙認した神をあざける。悲惨な収容所生活を振り返り、神をのろうことを儀式として、性的興奮を高めていると言ってもよい。魅惑的な容姿で男性を狂わす魔女のごとき一面を持ち、生き方を改めようとするハーマンを誘惑し泥沼に引き戻す。収容所の影響で何事も強制されなければできないと漏らし、ハーマンと似て、しばしば極端から極端へと移動する。ヤドウィガの純朴な愛とは異なり、マシャは自分との複雑な性格の類似性を認めるがゆえに、ハーマンを愛しているのであろう。ただし、子供を嫌うハーマンと異なり、マシャには、ホロコースト生存者である老母を安心させるためにも結婚して家庭を築こうとする一面が垣間見られる。神をののしり、母親のかたくなな信仰心に憤りつつも、結局、死の間際にユダヤの道に回帰するしぐさを示すのである。

このような愛の迷路をさらに複雑化する女性として、子供とともに殺

されたと思われていた最初の妻タマラが出現するのは、『メシュガー』冒頭でも語られるホロコーストのもたらす皮肉である。タマラは大戦の勃発時にはハーマンと離婚寸前のヒステリックな女性であったが、ヒトラーやスターリンによる過酷な試練を潜り抜け、思わぬ強靱さと安定性を獲得している。体内に残るナチスの弾丸を「ユダヤ化した」というが、そのことはタマラが苦難の果てに勝ち得た力を象徴しているのであろう。2人の我が子を殺された悲しみから神の存在を否定する言葉を吐くが、反面、家族を気遣い死地に赴く父親や、収容所で一夜にして成長した子供たちや、そこでさえ神への祈りを絶やさないラビなど、極限状況における崇高な人間性のほとばしりを感動的に語るのである。彼女は、「本質的に霊的な人間」であり、自分をもはやこの世のものと考えていないが、悲惨を忘れようとせず、過去に生きる態度を崩していない。ハーマンと異なり、彼女にとって愛は戯れでなく、したがって、いかに虚偽に満ちていようと、やはり夫がこの世で最も近い存在であると思う。そして、自己の行動に決定を下せない状況に陥る彼を、天使のごとく気遣うのである。

一方、これら3人の女性と関係するハーマンは、顔色は悪く猫背であり美男子でさえなく、鏡に映る自らの姿におびえるほどでありながら、不思議と女性を惹きつける。そうした彼の性格の一端として、ホロコースト以後の意識が抜きがたい。ナチスの恐怖から解放されたアメリカに住みながら、その平和と安全が信用できない。アメリカでさえ生き物は殺され、血は流され、「いたるところにトレ布林カ強制収容所が存在している」と思うからである。したがって、いまだに虫けらのように隠れ住み、ブルックリン、マンハッタン、ブロンクス、そしてキャツキル保養所にさえ、「アメリカ版干草置き場」を準備してある始末である。それでいて、そのいずれにも安住できない。常にそわそわと歩きながら、ナチスからの隠れ場を探し、その上、敵が勢力を盛り返しニューヨークを占拠した場合を想定し、隠れ家を発見されたときには、彼らに弾丸の

雨をお見舞いし、最後の一発を自分のためにとっておく、という強迫観念が抜けることはない。また、毎夜悪夢にさいなまれ、疲労感が抜けきらない。もはやユダヤ教も信じられず、同じ建物に住む年配の亡命者たちからも、また広くユダヤ社会からも、孤立して暮らす。事実、いったんはタルムード学者にあこがれ、よきユダヤ人になることを決意するが、それが長続きしないのである。子供を親元から奪ってゆく世界では、もはや子供を作ろうと考えないし、「世界の向上」を叫ぶ他人の戯言には憤りを禁じえない。この世との隔たりを常に感じ、浮かれ騒ぐ人々の間でいたたまれず、亡霊に囲まれ焼け跡に一人たたずんでいることが一番似つかわしい。これらは彼のホロコースト以後の意識である。

確かに、彼がポーランドで干草置き場に隠れ過ごした3年の空白が、彼の性格をゆがめた事実是否めない。陽の目を見ず、害虫に悩まされつつ、隠れて暮らしたその期間は、ゲッターや収容所の生活を免れたものの、人生で取り返しのつかない空費を生み出してしまった。この意味で、彼は紛れもなく、ホロコーストの犠牲者である。しかし、それだけでなく、シンガーは、「ヒトラーよりずっと以前に犠牲者」であった彼の背景を掘り下げてゆく。

それはひとつには、彼が学んだ哲学の影響である。裕福であった父親は彼が現代的なラビに、母親は彼が医師になることを願ったが、彼自身は哲学に傾倒していった。しかし、哲学は人間を誘惑から守ってくれない。かえって、ショーペンハウアーやヴェニンジャーに惹かれた結果、彼は自己や人類に信頼のもてない享楽主義的な運命論者になってしまった。実際、物事が起こるに任せ受身的に振舞う彼の横に置けば、『ルブリンの魔術師』ヤシャでさえ、よほど積極的に見えてくる。

また、「たとえ10人の敵に痛めつけられても、自ら及ぼす害には比べようがない」とは、『ショーシャ』や「猿のゲッツェル」(『降霊会』所収)にも見られる表現であるが、これは紛れもなくハーマンにも当てはまる。彼にとって最悪の敵はほかならぬ自分なのである。たとえば、ホ

ロコースト以後は子供を持ちたくないという考えにしても、それは大勢の子供が虐殺された事実に基づくのみならず、そもそも「2人の子供にとって決してよい父親でなかった」彼の利己的な性格や、未来はどうなってもかまわないという無責任さや、さらには享樂的な性格を裏付けるものといえよう。

彼の考えによれば、人間はホロコースト体験から学んだことはほとんどなく、相変わらず愚行を繰り返している。「ユダヤ民族の半分は虐殺されたのに、残り半分はパーティに興じている」一方、「ヒトラーが死んでもその後継者はいくらでもいるのだ」。また、「新ナチ党がドイツばかりでなくアメリカでも形成されつつある」上に、裁判にかけられない多くの旧ナチ党分子がのさばっている。こうして悪が栄え、人々が同じ過ちを繰り返す世界を彼は皮肉に眺めている。

この見方は、シンガー自身の人間観や歴史観を代弁しているに違いない。それはまたシンガーの読者の大部分が抱く感想でもあろう。人間は、幾多の悲劇からも学ぶことは少なく、愚行を繰り返し、それでも未来は明るいとそぶく。その一方で、ユダヤ人たちはナチスによって石鹼にされ、共産主義者によって革命の肥料にされたのである。

それでは、こうした人間史の皮肉な循環に対して、ハーマンのように、「生存に終止符を打つ勇気のない者たちは、意識を殺し、記憶を窒息させ、希望の最後の痕跡まで消してしまう」という態度は正しいのか。彼は、「動物を殺して食べる点で人は全てナチスだ」と考え、肉食主義者になろうとする一方で、自らも悪に加担している。たとえば、多くの事業に手を出し金儲けをしているラビ・ランバートの宗教書を代筆し、善良の上もない命の恩人ヤドウィガを裏切り、魔性の女マシャとひそかに交わる。著しく一貫性を欠いた彼自身の性格が、彼にとって最悪の敵となっているのである。

また、別の面において、マシャの老母が認めるように、彼にはユダヤ教の知識が豊富であり、聖典研究から喜びを得て、神の道を目指すとき

もあるが、それが長続きしない。ヤシャのように、鍛錬の持続性が問題になってくるが、それが欠如していることから、自滅的な「文明」に負担してしまうのである。収容所から奇跡的に生還した妻タマラがつぶやくように、ハーマン自身が「何も学んでいないし、何も変わっていない」のである。

ハーマンが一貫性に欠け、自他を悲惨に巻き込む生き方に拘泥するのと対照的に、ホロコースト以後の混沌においてさえ、少数ながら立派な生き方を貫く人々が存在している。ユダヤ教ハシディズム派に属するタマラのおじアブラハム・ニッセン師は、すべてを神の思し召しであると信じるがゆえに、あらゆる地獄を潜り抜けても、精神の健全さを失うことがない。ナチスによって滅ぼされたラビたちの著作を集めているこの学識豊かな人物は、古きポーランドのユダヤ世界が宿る家に住み、ユダヤ民族は永遠に喪に服し、ヨブ記を読むべきであるという。(もっとも、彼でさえ、神の慈悲を疑う瞬間があり、したがって、ハーマンら若い世代の不信仰に理解を示すことはあるが。)最後に彼は妻とイスラエル永住を決意し、古書店の経営を姪タマラに託すのである。

そして、もう一人の例は、マシャの老母である。左のほほにナチスより受けた傷跡を残し、収容所生活とその後の病気とによって往年の美はすっかり衰えている。終戦後ルブリンの病院で死を受け入れようとしていた矢先、娘によって生へと呼び戻された彼女は、生き延びたことに対して罪意識を抱き、無数の忌まわしい思い出にさいなまれつつ、ホロコーストの犠牲者を悲しみ、常に黒衣を身に着けている。彼女は正統派のユダヤ人であり、マシャの最初の夫でやはりホロコースト生存者であるレオンも認めるように、「あらゆる地獄の苦難を受けながら、高潔さを維持した」のである。

したがって、ニッセン師やマシャの老母に見られるように、神や過去に対する個々人の態度もまたホロコースト以後の生き方を決定する要素であり、この点で、ハーマンはホロコーストのみでなく、最悪の敵であ

る自己の性格の犠牲者でもあるのだ。

ハーマンをそのような犠牲者とした要因は、神への信仰を喪失したことであろう。彼は、タマラ、ヤドウィガとすでに2人の妻を持ち、さらに3人目のマシャとも結婚するが、それに伴う混沌や危険から生じるスリルやサスペンスを楽しんでいる節がある。それは『ルプリンの魔術師』のヤシャ以上に、自己を複雑で狂気じみた状況に陥れる明らかな自殺行為であるけれども、確かなことは死だけだという彼にとって、懐疑主義や快楽主義や利己主義から導き出された当然の帰結なのである。ホロコーストが生じた世の中では神が信じられず、倒錯したその世界では、同時に3人の妻を持つことも含めて、何が起ころうと不思議ではない。人を制御する神や戒律の効力が失われているのであるから、唯一確かな死を前にして可能な限り快楽を得ようとし、性欲や物欲の泥沼にはまり、快楽と背中合わせの絶望を飲み込む羽目になってしまう。

そして、3人の妻たちを手放したくないハーマンは、混乱状態を「どうやらやってゆく」シンガーの生き方を試みるが、結局、進退窮まって落ちてしまう。とどのつまりは、かねての逃避願望が強く頭をもたげ、人生のもつれがもたらす責任を全て回避し、いずことも知れず雲隠れしてしまう。

ただし、最終場面において、シンガーは新しい発展を用意しているようである。それは、単純ながら信仰の篤いヤドウィガと、ホロコーストを経て天使の域に近づいたタマラとの共同生活が始まることである。タマラは、ハーマンの子供を身ごもったヤドウィガの出産準備をかがいしく助けている。そして、そこにハーマンに宗教書の代筆を依頼していたラビ・ランバートの援助が加わってゆく。彼は、アメリカで生きるユダヤ人の墮落を象徴しているかもしれない反面、自ら経営する老人ホームにマシャとその母親を住ませ、後にこの2人の埋葬や、ヤドウィガの出産費用を受け持つのである。タマラ、ヤドウィガ、そしてラビ・ランバートは、無責任なハーマンと比べて、責任を持って行動する

人々であり、ここには孤立した個人から新しい共同体への発展が期待できそうである。そして、タマラが、できることなら来世で再びハーマンと結ばれたい、と述べていることが、ホロコーストを含む最悪の俗世界を超越した未来を志向し、大いに示唆的であると言えよう。

5 現代のツァディーク（義人）

古きユダヤの歴史を生きてきたシンガーは、ベローやマラマッドと同様、「間接的な目撃者」の立場から、ホロコースト前後いずれかを背景として、失われた世界を描いている。その世界より数作を選び、主人公たちのポグロムやホロコーストへの反応、そしてそれ以後の生き方を見てきたわけである。

これらの作品においてシンガーは、ホロコーストを基盤とした視点から、この墮落した罪深き世界を映し出し、悪夢の雰囲気をかもし出す一方、それに対抗するものとして、沈黙する神に対する抗議の宗教を唱え、互いを殺し合う世界を創造した神に肉食主義で抵抗し、少数ではあるがホロコーストを経ても崇高さを失わない生存者たちに存在価値を与えている。また、日々の宗教的な鍛錬を強調し、苦悩を通して浄化される人間像を描いている。危機に直面した際の信仰の意義が問われ、ユダヤの古い道に回帰することの中に救済への道が求められている。

シンガーが繰り返し描く失われた世界、偉大な宗教の教えを日々実践した東欧ユダヤ人たちの生き方や精神構造から、われわれは人として生き延びてゆく道を学べるであろう。善と悪が常に戦うこの世においては、個々人がよりよく行動するよう努めてゆくしかないのである。シンガーは、神や人の存在に関する永遠の問いを提示しつつ、現世と来世、個人と集団、人と神とを結ぶ、神秘的でかつ実際の指導者、「現代のツァディーク」であると言えよう。

参考文献

- Allentuck, Marcia. ed. *The Achievement of Isaac Bashevis Singer*. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois UP, 1969.
- Bellow, Saul. *Seize the Day*. New York: The Viking Press, 1956.
- . *Mr. Sammler's Planet*. New York: The Viking Press, 1970.
- Berger, Allan. *Crisis and Covenant: The Holocaust in American Jewish Fiction*. Albany: The State University of New York Press, 1985.
- Blatty, William Peter. *The Exorcist*. New York: Bantam Books, 1971.
- Dresner, Samuel. *The Zaddik*. New York: Shoken Books, 1974.
- Guttman, Israel ed. *Encyclopedia of the Holocaust*. New York: McMillan Publishing Company, 1990.
- Siegel, Ben. *Isaac Bashevis Singer*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1969.
- Singer, Isaac Bashevis. *The Family Moskat*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1950.
- . *Satan in Goray*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1955.
- . *Gimpel the Fool and Other Stories*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1957.
- . *The Slave*. Middlesex: Penguin Books, 1962.
- . *In My Father's Court*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1966.
- . *The Manor*. Middlesex: Penguin Books, 1967.
- . *The Séance and Other Stories*. Middlesex; Penguin Books, 1968.
- . *The Estate*. Middlesex: Penguin Books, 1969.
- . *An Isaac Bashevis Singer Reader (The Magician of Lublin を含む)*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1971.
- . *Enemies — A Love Story*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1972.
- . *A Young Man in Search of Love*. New York: Doubleday & Company, 1978.
- . *Old Love*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1979.
- . *Reaches of Heaven*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1980.
- . *The Penitent*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1983.
- . *The Image*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1985.
- . *Meshugah*. New York: A Plume Book, 1994.